

世俗批評とオカルト宗教


三原 芳秋

いま世俗批評がオカルト宗教に向っている、などと言うと奇異に聞こえるかもしれない。

Edward W. Said が、*The World, the Text, and the Critic* (1983) の序章に “Secular Criticism”, 結語に “Religious Criticism” を置いた背景には、1970 年代以来欧州大陸より流入し北米の批評界を席卷していた「テクスト性」の呪物化に対する強い危機感があった。そもそも「文学」の神学的体制を内破する起爆剤であったはずの「理論」が、外来のお守り言葉を濫用することによって自己を権威づける、またひとつの神学的体制と化しつつあったためだ。Said は、あくまで、テクストの世俗世界性にこだわり続ける。それは、Vico が人間の学を神の世界から切り離し、異教的＝歴史世界的な次元に定位したのをうけて、世俗世界に先行／超越するカテゴリーの誘惑を徹底的に排除する姿勢に他ならない。英米文学批評におけるその先駆としては、言うまでもなく Raymond Williams の名を挙げることができるが、Gauri Viswanathan が鋭く指摘した Williams 的世俗批評の「方法的な罫」——帝国の問題系を付随化してしまう本国中心の遠近法——を乗り越えたところに Said の「対位法的読解」を位置づけることができる。

このような文脈をもつ世俗批評だが、その「世俗」の語感ゆえか、(Talal Asad や Ashis Nandy が批判するような)「世俗主義」としばしば混同されるきらいがある。宗教を切り離せば世俗批評になるという浅はかな考えは、まさに、宗教＝イデオロギーと短絡して切り捨てることにより自己の超越を担保する世俗国家のイデオロギーと同型であり、今日グローバルに認められる世俗的国民国家＝帝国体制の暴力性と共犯関係にあるとさえ言える。ここに、Viswanathan が *Outside the Fold* (1998) で提出した「信仰の世俗世界性」という概念の画期的な意義を見いだすことができる。これは、世俗主義によって公共圏から放逐された信仰を、主体性構築の重要な契機として再認識することによって、世俗世界性の相の下にその政治性を取り戻す試みだと言える。本書においては、その政治性をもっとも先鋭化する場面として「改宗」のナラティブが扱われるわけだが、改宗を (William James 的な) 個人心理の問題に還元することなく、オルタナティブな知の生産活動とみなすことによって、世俗国家というより巧妙化された神学的体制を脱臼する批評行為としての改宗が前景化される。さらに、英 - 印の対位法的読解によって、国民国家にとどまらず帝国をもその根源的批判の射程におさめている。いわば、Said 的世俗批評を、その世俗主義化の傾向に抗しつつ、宗教によって代補するプロジェクトなのである。世俗批評の今日的な可能性の中心は、世俗主義のドグマを遵奉し、世俗文化を呪物化し、輸入理論の外的権威につられて転回を繰り返すような一部の「批評」にではなく、まさに世俗主義そのものの仮面を打ち砕く批判的態度にある。

このプロジェクトの最先端が、いま、オカルト宗教に向って



いる。遠からず上梓されるであろう Viswanathan の近著 (*In Search of Blavatsky*) では、神智学 (Theosophy) が主題化され、Blavatsky 夫人、Annie Besant, James Cousins といった人々が一方の主人公になるという。19 世紀後半から 20 世紀前半、帝国主義が全面化し外部を失う一方で、普遍性＝個／類の論理が後退し特殊性＝種の論理が勃興する思想状況にあって (これはすぐれて今日的な状況でもある)、既存の枠組みに収まらない脱領域的な運動であるこのオカルト宗教が、いかにして世俗世界的な抵抗の拠点として描き出されるのか。近著を待ちきれない思いである。

〈主要参考文献〉

- Asad, Talal. "Reflections on Blasphemy and Secular Criticism." Hent de Vries, ed. *Religion: Beyond a Concept*. New York: Fordham University Press. (2008)
- James, William. *The Varieties of Religious Experience*. (1902)
- Nandy, Ashis. "The Politics of Secularism and the Recovery of Religious Tolerance." Veena Das, ed. *Mirrors of Violence: Communities, Riots and Survivors of South Asia*. Delhi: Oxford University Press. (1990)
- Said, Edward W. *The World, the Text, and the Critic*. (1983)
- Viswanathan, Gauri. "Raymond Williams and British Colonialism: The Limits of Metropolitan Cultural Theory." *The Yale Journal of Criticism* 4.2. (1993)
- . *Outside the Fold*. (1998)
- . "The Ordinary Business of Occultism." *Critical Inquiry* 27.1. (2000)
- . "'Synthetic Vision': Internationalism and the Poetics of Decolonization." Bermann, Sandra & Michael Wood, eds. *Nation, Language, and the Ethics of Translation*. New Jersey: Princeton University Press. (2005)
- . "Said, Religion, and Secular Criticism." Sökmen, Müge Gürsoy & Başak Ertür, eds. *Waiting for the Barbarians: A Tribute to Edward W. Said*. London: Verso. (2008)

(同志社大学講師)